

「2018 冬季被災地支援ボランティア福島・南相馬」に参加して 萩光塩学院中 3

福島希衣

この冬休みに福島県の東日本大震災のボランティアに行き、学んだことがあります。それは、私たちが住んでいる日本で起きていることに関心を持つことが大切だということです。

私は元々、仲の良い先輩が被災地ボランティアに参加した事がきっかけで、参加してみたいと思い参加しました。最初は場所が離れているということや、期間が長いという事もあり、不安がありました。今思うと、その不安の中には、現実を知るための「勇気」の無さもあったのだと思います。しかし、ボランティア活動をしていく中で、「自分には何が出来るのだろうか」と思うようになり、いつしか不安も消えていました。

私が活動した期間は4日間で、その間にも様々な経験をしました。津波の被害に遭った地域に行き、今では何も無いただ草っ原が広がっている様な場所に行きました。そこには、元あった町並みは残っていませんでした。又、津波の被害に遭われた方々のお話も聞きました。津波から助かることが出来ても、その後の仮設住宅での厳しい生活があったことを知りました。私はどれもずっと忘れないと思います。

しかし、その中でも特に心に残っている事があります。それは、福島県南相馬市の「さゆり幼稚園」に見守りの手伝いとして言った事です。幼稚園児の皆はすごく元気で、パワーをあげるつもりで行った私が、反対にパワーを子供達からもらいました。しかし、そんな子供たちの自由でさえも、放射能は奪ってしまうのです。それは、さゆり幼稚園の園内で児童と遊んでいた時に気づきました。なんと、砂場が屋内にあったのです。私が聞くに、福島県ではまだ放射能が残っているという事で、子供たちが自由に外で遊べない状況になっているとの事です。私には保育園に行っている妹がいます。妹は毎日、帰って来てから友達と外で遊んだ事を、楽しそうに話してきます。しかし、先程の事を聞いて、外で遊べるような環境があるのは、当たり前ではないんだと、初めて気付きました。それと同時に、2011年に起きたあの震災の被害は、まだ終わってはいないんだと思いました。私は、ボランティアに参加する前、「2011年の東日本大震災は、もう前の事、終わった事」として捉えていました。しかし、それは自分が住んでいる地域と違う地域の出来事は、「他人事」の様に思っていた部分があったからだだと思います。「私には関係ないから」「別に関係ないから」そんな気持ちを持っていた私は、実際に被災地に行き、現実を自分の目で見ることで、今までの自分の考えがどれだけ甘く、又、どれだけ恥ずかしいものだったかを、改めて知ることが出来ました。このボランティアに参加して自分自身が、人として成長出来た部分もあるのではないかと思います。今回、このボランティアに参加した時間は、わたしにとって何が大切なのかを教えてくれた。本当に良く、貴重な体験が出来た時間でした。ボランティアの体験をした人達は、自分たちが学んだ事を周りに伝えて行き、東日本大震災の被害が「過去の事」として、皆の記憶から消えない様に、努めて行きたいです。

そして、今でも震災によって、心や身体に深い傷を負っている方々が、1日も早く笑顔で幸せに満ちた生活を送れますように、願います。

昨年12月末に普段、経験できない体験の場を用意してくださりありがとうございました。僕は萩ロータリークラブ“メルセダリアン インターアクトクラブ”(<http://hagijc.jp/2017/?p=1003>)というボランティアをしたりする部活に入っています。ボランティアに参加し、することは好きな方です。しかし今回の福島のボランティアは遠いこともあり気が向いていませんでした。だから今回は参加しないでおこうと思っていました。

しかし、今回は、結果としては参加できなかった野村君（参加直前、インフルエンザにかかり、参加できなかった）が「一緒に行こう」と言ってくれたことで決意出来ました。ボランティアとしてあまり行動は出来ませんでした。学校では体験できない事も出来ました。一番印象に残ったのが、山本さんのお宅を訪ねて、東日本大震災の時の事、その後の生活についてお話を聞くことが出来たことです。

テレビなどのアナウンサーは放送しているだけですが、山本さんのお話は実際に経験されたことなので言葉の重みが違いました。話がなまなましくて少し気持ちが沈むこともありました。実際このようなことが起きてしまい「怖い」と感じました。また、仮設住宅での人間関係の事も話されていました。改めて人間関係を大切にしたいと思いました。

最後に、自分の中で風化してきた震災の出来事を改めて、記憶に残すことが出来ました。今後も後世に伝えて行くべきことだと思いました。とても有意義な時間を過ごすことが出来ました。参加出来て良かったです。この様な機会を設けて頂きありがとうございました。

「被災地支援ボランティアに参加して」

今回、僕がボランティアに参加したのは、東日本大震災から7年経った今の姿を自分の目で見てみるべきだと思ったからです。2011年の震災当時、僕はまだ小学3年生でした。テレビのニュースを見ても何が起こったか判りませんでした。ですが、福島にボランティアに行った今なら、どれだけの事が起こったか理解しました。

福島県の南相馬市を訪れて、翌日に幼稚園を訪問しました。その幼稚園で驚いたのは、室内に砂場があるという事でした。「外で遊べない子供たちの為に作った」と聞いて悲しい思いがしました。自分たちには、「砂場は外に合って当然」という事が、福島に行くと当然ではなくなって来るので、考えさせられました。ボランティアの間に視察で周辺を1日かけていろいろな所を巡りましたが、特に印象が深かったのは、津波に呑まれたパトカーです。そのパトカーは原型を留めていなくて、パトカーといわれなければ気づかない位でした。僕たちが訪れた時にもお供え物が置いてありました。7年経った今でもお供え物があるという事は、町の人達から感謝されていた証拠ではないかと思いました。

3日目には掃除をして、午後から実際に津波を体験されたご夫婦のお話を聞きました。話の一つ一つに重みがありました。人が流された話や、近所の人津波に呑まれた話など、今まで自分が経験したことがない話などを聞かせて頂いたので、貴重なお話でした。

今回、ボランティアに参加出来て良かったです。福島と山口では遠く離れているのでどうしても他人事と感じがちです。ですが、僕は憶えておくべきだと思いました。人はだんだん古い出来事の記憶を忘れていきますが、この震災は後世に伝えていくべきだと思います。

「2018 冬季東北被災地ボランティア福島・南相馬」を終えて 山口教会 瀬川憲昭

今回の福島へのボランティアは被災後 8 年近くが経過し、年毎に参加希望者が少なくなっている事に少々、不安を感じていました。山口ブロック（山口、防府、萩）の教会を中心に、プラス小野田サビエル高等学校と萩光塩学院宛に特別なお願いの手紙を添え、チラシを送付しました。その結果、萩光塩学院から先生 1 名、中高生併せて 4 名の参加希望を受け、本当に嬉しい、ありがたい気持ちでお受けした。ただ、その内 1 人の生徒さんがインフルエンザの為、直前にキャンセルせざるを得ない状況になり残念でした。でも、次の機会に期待しましょう。結局、今回は柴田神父、我々夫婦、光塩から 4 名の計 7 名の参加となりました。

自分自身は今回で 6 度目の福島訪問となります。時期的に正月を控え、公的な機関は一部を除き業務は止まっていたが、その分、隣接するさゆり幼稚園の預かり保育の見守りや、今まで行ったことのなかったカリタス畑での作業、3・11 大震災当日に津波から間一髪、脱出された山本夫婦の貴重な体験を聞く機会を得ました。そして、いつも我々に寝食を提供してくれているベースの年末大掃除をすることが出来ました。

その中でも特に山本さんご夫婦の体験談は心に響きました。実際に目の前に迫ってくる津波に、それも障害の方を抱えての避難でした。ただ、何が幸いしたか、たまたまキーを付けたまま置いていた軽トラックが命を救ったと、言われていました。普段、何気ない行動が、偶然にも紙一重で奇跡的に助かった事を話されました。この津波によって、多くの家族、友人、知人を失いながら、その時を思い出すのもつらいだろうと思いますが、山本さんは一言一言かみしめながらも淡々と当時の事を振り返り「震災によって失ったものも多いが、得た物も沢山ある。それを生かしながら、これから先の生活を頑張っていきたい」と話されました。因みに、山本宅と前日行ったカリタス畑は道を挟んで目の前であった事に気が付いた。何か繋がりがあることも感じました。

町全体を見ると、初めて訪れた 2014 年頃と比べるとブルーシートも無くなり、新しい社屋、住宅がどんどん建ち並び、幹線道路も整備され、特に海岸線沿いは行く度に道路の形態は変わっていました。また、ソーラーパネルの設置が異様と思えるほど増え続けている現状にちょっと疑問を抱きました。と云うのも、地方によっての差があるのかも知れないが、九州では電力会社の受け入れ量と供給量のバランスが保てず、ソーラーからの受電を遮断したと聞きます。ここ福島でソーラーパネルが何十万枚あるか判りません。これらが全部、原発が止まっている間、必要なのか？ これでもまだ足りないのか？ これも判りませんが津波で被災した田畑の有効活用の面として考え抜いた先がこれだった事に疑いの余地はないでしょう。うまくバランスが保てることを願うばかりです

これまで訪問して単純に思った事を箇条書きにします。

- *これまで貯め続けたフレコンパック（何十万袋？）はどこでどうして処理するの？
- *原発を廃炉する為に 40 年かかるのになぜまだ新しい原発を作ろうとするの？
- *第一原発の汚染水はまだタンクに貯め続けているの？ そのスペースはあるの？
- *放射線の線量はいつになったら平常に戻るの？
- *あれだけのソーラーからの需要と供給のバランスを電力会社はうまく調整できるの？
- *請戸小学校は残されるの？

まだいろいろ思うところがありますが、今回、福島のボランティアに初めて参加してくれた萩光塩学院の先生、生徒のみなさんは、今までメディアからの情報しか得ていなかったと思います。こ

の度、初めて被災の現場に来て生の姿を見てどう感じ、どう他の人々に伝えて行えてくれるのか、若い目から見た現実を、身近なところから、広めてくれること期待したいです。

「2018 冬季東北被災地支援ボランティア福島・南相馬」 山口教会 瀬川由生子

今回は、学童保育、被災地視察、カリタス南相馬ベースの大掃除等々でした。

以前から私はベースに集まって、“ミニぞうりストラップ”を作っておられるグループ「真こころ」の方々が特に気になっていました。どのような体験をなさった方々の集まりだろうかと思っていましたが、今回はシスター吉岡さんの計らいで「真こころ」にご夫婦で来られている山本さんのご自宅に伺うことができました。お二人から、2011年3月11日の体験談を聞きました。

3月11日雪がチラチラ降っていて、ダルマストーブで暖を取っていた。突然、ストーブにかけていたやかんの湯がこぼれそうな程、地震で揺れた。でも、ここまでは津波は来ないだろうと安易に考えていた。震災の時は、海から1.3キロメートルあり少し低いところに住んでいた。海拔は2M。隣のブロックがバラバラと落ちた。……省略……。2回目の地震から大きな津波が来るまでに仏壇も仏様も飛び出していた。「こんなに揺れて他の家は？」と、外を見るとブロックがドミノ倒し、これは大きな津波が来るな！とその時思った。障害を持っている弟を先に、次にふみ子さんがトラックに乗る。運よくトラックはキーを付けたまま、道路向きにと、とめていた為、すぐに逃げ出せた。鍵が家の中にあり、取りに帰っていたら間に合わなかっただろう。何か物を取りに戻った人は皆死んでしまった。

家が流れるのが見えた。道路が混み、家が流された為瓦が下に見えた。何もなく着の身着のまま。三日後原発退避。避難した先は原発の放射能が高く、着ていた服をビニール袋に入れ捨てた。情報が入って来ない。

娘さん宅にお世話になり、その後仮設住宅に。

仮設も床が5軒繋がっていて、音がしないように気を使った。

外国の避難民を見たら、贅沢は言えない…省略。

最後に自分の命は自分で守る。避難場所を決めておく。悪い事ばかりでもなく知人、近隣の人達に対し、同じ立場で「どうだった？」とお互いが思いやった。人との繋がり、絆、親切が身に染みた。

「思い出したくない、海を見るのもいやと言われつつ、被災者として震災と原発事故を風化させてはいけない」と語って頂いた。ボランティアに参加した中学生、高校生、私達も涙を拭きながら話を伺った。淡々と話して下さった山本さんご夫婦にとっても大きな課題を頂き、感謝と祈りを捧げつつ、帰路についた。

2018年冬季 福島・南相馬ボランティア 徳山教会 柴田 潔 神父

今回のボランティアには、東京でのイエズス会の会議に参加した後に合流したため、残念ながらさゆり幼稚園でも見守りはできませんでした。しかし、用意した恐竜貯金箱を園児さんが楽しく作っている写真を見て嬉しくなりました。滞在は2日間になってしまいましたが、4点が印象深く残りました。

1点目は、“希望の牧場”の吉沢正巳さんから話をうかがったときです。

(http://jafmate.jp/jmp/311/iidate_namie/001.html) 吉沢さんのお話は、初めて聞く方には

極端な主張に思えるかもしれませんが、ほとんどのことは「その通り！」でした。2011年の震災前、反原発を主張する人たちは極端な考えを持つ人、と受け止められていたように思います。恥ずかしながら、私自身もそうでした。震災後でさえ、依存度30%の原発をゼロにするのは無理だ、とさえ思っていました。しかし、福島に来て、自分は間違っていたことを猛省しました。原発は、なくさなければいけない、そう実感しました。吉沢さんは、そのこと力強く話されました。しかし、

電気事業連合会のCM (<http://www.fepec.or.jp> エネルギーミックス、原子力コンセンサス、世界最高水準の安全性という言葉を使って原発の再稼働を訴えている)では、いかに原発が必要かをお金を使って宣伝しています。吉沢さんの「その通り！」という訴えをかき消そうとしています。そのことに、多くの国民は気づいてないでしょう。吉沢さんは「原発事故は終わっていない。続いている。」と言われてましたが、まさに「その通り！」です。そのことを改めて感じました。私は、イエズス会に入る前に、住宅会社の営業をしていました。もし、自分のお客様が原発事故で家はあるのに住めなくなってしまうたら、どれだけ残念に思うか？ 自分のお客様の故郷が変わってしまい、仕事も家も変わらなければならなくなっているのを見たらどう思うか？ 同じ事故が自分の街で、あるいは東京・大阪などの都心で起きたら、住民はどう思うか？ 決して許しはしないでしょう。その感覚を失ってはいけません、と思いました。

2点目は、現地視察で“なみえ創成学園（小学校・中学校）”を通った時です。大きな校舎と広いグラウンドに小学生10名、中学生は2名が通っている、と聞きました。浪江町は、2017年3月31日に一部地域を除き避難解除となりましたが、震災前に2.1万人いた人口は、現在は600人くらいと聞きました。そのうちの12名が“なみえ創成学園”に通っています。まず感じたのは、学校にしては児童が少ない、部活動もできない事。次に感じたのは、子どもたちは“地域の宝”である事。浪江町の将来を背負うプレッシャーを感じることも、あるのでは？という危惧でした。そして、最後に「子どもたちがこの学校で過ごせて良かった！と思えるようになって欲しい」という願いが湧きました。今、私は3つの幼稚園の園長をして300人の園児と関わっていますが、環境による違いをまざまざと感じました。

3点目は、いつも感じることですが、カリタス南相馬ベースが醸し出す祈りの共同体です。私は、日頃、幼稚園の仕事で忙しく、同居の神父さんとは生活パターンが違うので共同体で祈れていません。その点、ベースは、朝の祈り、幸田司教様のしっかりとした説教のある朝ミサ、夕食後のベネディクションがあります。修練院のように守られた環境を除くと、なかなかこのような祈りの共同体に身を置けません。カリタス南相馬ベースを訪れて、祈りの生活を取り戻します。今回もその恵みを受けました。

4点目は、山本さんのお話です。要約は下記に記しましたが、別れ際に避難先を家族と話し合っておくなど防災のアドバイスがありました。被災地で何度も何度も、防災の必要性を感じてきましたが、今年は、幼稚園の保護者向けに防災教育をしようと決心しました。これまで、被災地で伺った話や、日赤の防災教育の資料

(http://www.jrc.or.jp/activity/youth/news/180830_005408.html)などを参考に、防災への意識を高めてもらおうと思います。これまでは、ボランティアの体験を園児・保護者に話したり、非常用持ち出しリュックを用意してきましたが、一歩先に進もうと思います。かけがえのない命を守るためにどうしたらいいか？ 真剣に考える機会をいただきました。

最後に、冬のボランティアを企画した時には、自分と瀬川さんご夫婦以外に申し込みがないのでは？ と心配していましたが、萩光塩の学生さんと先生が参加してくれました。貴重な時間をボラ

ンティアに当ててくれたことに感謝するとともに、この体験を生かし続けて欲しいと感じました。

山本二吉さん、フミ子さんの津波体験・避難生活の体験

南相馬市原町区萱浜字原ノ山 79—11 2018年12月29日 2時40分から4時20分まで

命だけ助かった。それは「まだ生きろ」という証拠。亡くなった方を大勢知ってる。助かった自分との違いは何か？ 考え続けている。

その日の経過

当時は、奥さんの身障者の弟さんと3人で暮らしていた。2匹の犬も飼っていた。

2011年3月11日は、今日のように雪まじりで寒い日だった。ストーブで暖を取っていたら激しい揺れに見舞われた。一回目の揺れの後に、倉庫からトラクターを出そうとしたがうまくいかず、隣の人の車で引っ張ってもらって出せた。今から思えばそんなことしてる場合はなかったが・・・2回目の揺れで、隣の家の屋根の瓦がどんどん落ちてきた。地震の後、夫はオロオロしていたし「津波は来ない」と思っていたのですがすぐには逃げてなかった。身障者の弟が、地震の様子を知ろうと、たまたま道路に出ていた。これが幸いした。消防団の人が「大きな津波が来たから逃げろ！」と叫んでいるのを聞いた。消防の車が「乗りなさい！」と言ってくれたので弟と奥さんが乗って逃げた。逃げる途中、津波で2階建ての建物が流されるのが見えた。

夫は、午前中、軽自動車を動かした際に道路向けに駐車しそのまま鍵をつけていた。これが幸いした。近隣の部落には、95軒、一つ下の段の部落には60軒あったがこちらは全滅し45名が亡くなられた。

山本さんの旧家屋は、特養のヨッシーランド（南相馬市原町区の介護老人保健施設で海から約2キロの平地にあった。利用者の36名が亡くなった）のそばだった。

近隣の方で助かった方

・津波で流されたときはもうダメかと思ったが、海水の上の方に光が見えたので、そちらを目指して水の中をどんどん上がった。トマト栽培のビニールハウスの骨組みが5階相当くらいになって積み上がっていて、頂上まで登ったので助かった。しかし、水が引くとかなり高いところに自分がいることに気づき足がすくんだ。降りようにも、針金が引っかかる。なんとか外して少しずつ降りていった。「助けて！」と叫びたくても、海水を飲んで喉がカラカラで声が出なかった。やっこのことで消防に助けられたら気を失った。

・祖父が運転している車に孫が乗っていて、後方を見ている。隣には祖母（妻）が運転している車が走っていてそちらが気になる。しかし孫は「じいちゃん、止まんないで！ 津波が後ろから来る！」と叫び続けた。妻には薄情だったけど、そのまま運転し続けて助かった。しかし、祖母（妻）の車は遅かったので津波に飲まれた。

・中学校の卒業記念に双子がカラオケに誘われた。行った子は助かった、行かなかった子は助からなかった。

・津波で流される最中、夫婦で板につかまった。しかし「二人は無理だ」と妻が手を離した。その後、海に2～3日漂った。海水は飲めないから、おしっこを飲んで喉の渴きをしのいだ。よく見つ

けてもらったと思う。

近隣の方で助からなかった方

- ・バックで車をとめていたので、道路に合流するのが遅れ逃げられなかった。
- ・飼い犬の鎖を外すのに手間取り間に合わなかった。私は、犬を諦めた。
- ・近所の朝倉さんのお孫さんはお腹が痛いからとたまたま学校を休んでいた。おばあちゃんは地震の後「2階から降りて来な！」と叫んだ。でも「怖い」と言って降りてこなくて間に合わなくて亡くなった。デイサービスで働いていたお嫁とおばあちゃんだけ助かった。一度に家族7名を失った。
- ・何かを取りに戻った人は全員がダメだった。

津波から避難した後に原発事故が

- ・津波の後、夫を探して避難所を回った。市立病院の待合室には白いベッドの上にご遺体はずらっと並べられている。顔を背けるようにして歩く人も・・・「あの人ダメだった・・・」「あの人助かった・・・」と噂が流れる。
- ・専門学校に避難したら「定時なので出て行って欲しい」と言われる。
- ・クリーニング屋の親戚を頼ろうと思いつく。持病の血圧の薬をもらいに薬局に寄るが、電気は点いていても誰も出てくれない。
- ・生涯センターはトイレが使えない。離れている道の駅まで行かなければならない。そうになると、身障者の弟には無理。別を探すことになる・・・
- ・3日後に原発が爆発する。しかし、情報が入ってこない。風向きのことまで考えていなかった。わざわざ線量が高い地域に避難してしまった。
- ・女房の実家に避難する。30キロ圏内は屋外退避となる。全く情報はほとんど入ってこない。サッシに目張りなどするが、自由がなく息苦しい。それに身障者の弟は我慢できない。
- ・「自分たちは70歳を過ぎているし、もう逃げなくてもいい」と思ったが仙台に住む娘が「すぐにおいで」と言ってくれた。そこにたどり着く分のガソリンの入った車を手配してくれた。米とネギを積んだが放射能を浴びたのを持っていっても仕方ないと、途中の山で捨てた。
- ・仙台に入るときにも、スクリーニングがあつて服は全部捨てさせられた。借りた服を着た。
- ・身障者の弟は、夜昼騒ぎ立てるので、長くは娘のところにはいられず4月20日までの滞在になった。
- ・仙台は、水とガスは使えなかったが幸いに、電気は使えた。
- ・コンビニ、スーパーには何もなかった。しばらくして物資が届くようになった。寒い中行列に並んでも途中、トイレに行くと、また最後尾から並ばなければいけなくなった。コンビニでは長机の上に商品が並べられ、その中から10人一緒に買い物をする。一人3品までと、制限がある。
- ・1つのカップヌードルを3人で分け合った。ガソリンを手に入れるのも大変だった。
- ・妻は、不動産の仕事をしていて人を頼って築40年と古いけどトイレ付きの戸建てを見つけた。でも、身障者の弟には馴染めなかった。
- ・最初の寺内仮設は山浴いで静かだったけど、半日陽が入らないので枝を切ってもらった。
- ・その後、鹿島地区の仮設住宅で5年。災害によって人の暖かさを身に染みだ。そこで知り合った松浦さんは、なくてはならない人になった。遠い親戚よりも近くの友人が大事。
- ・ある仮設は、5軒つながっているのだから歩くと響く。夜、眠りが中断されるので困る。はじめは「お互い様だ。働いてる人は帰りが遅いのは仕方ない。我慢しろ！」と言った夫が先に苦情を言いに行った。

- ・復興住宅は、所得によって賃料に格差がある。
- ・娘が「服を買って来なさい」というのでユニクロに行った。無理を言って短い時間で裾を詰めてくれた。親切な方もいて「悪いことばかりじゃない」と思った。
- ・避難先の小学校でいじめられる子もいる。
- ・今は身障者の弟は特別老人ホームに入っている。

生活の立て直し

- ・8年近く経った最近になって津波・原発事故後の避難生活を忘れるようになった。
- ・庭に花をいっぱい咲かせて、午後はカリタス南相馬スペースに行く日課。
- ・「今より先のことどうしよう？」と考えるようになった。津波のこと振り返るのやめるようになった。
- ・子どもたちは娘なので、後継はいない。夫婦、どちらかが亡くなったら同居させてくれることに。
- ・全然知らないところに一人で入って行くのは、年を取ってからだと寂しい。

今になって思うこと

- ・カリタス南相馬ベースの“まごころサロン”で必要な物資をいただいて、仮設の隣近所におすそ分けをした。仮設住宅を出るころには寂しい気持ちになった。これまで料理や苦労話や色々なものを分かち合ってきた。これからは、その良い関係が切れてしまうことを思うと、残念な気持ちになる。
- ・仮設に入ったからあった出会い。こういうことなかったら決して会えてない人たちがいる。
- ・津波は最悪のことだったけど、おかげでつながりもできた。悪いことばかりじゃなかった。
- ・自分たちは畑を持っていたので、それを売った。集団移転の時に替地を優先的に選べた。一度売って買い戻すようなもの。他の人たちは、くじ引きだったので自分たちはついている方だった。

人の痛みがわかるように

- ・大変なことがあってもまだ日本は恵まれている。何日かしのげば、トイレも食べ物も用意されてくる。
- ・中米からアメリカ国境を目指す移民集団の「キャラバン」たちは、命がけで逃げている。あの人たちは、津波の後の自分たちのようで、人ごとではない。アメリカ政府の言動は冷たい気がする。
- ・ボランティアさんが来てくれて、心が開かれた気がする。相手の痛みがわかるようになった。
- ・2015年の常総の大雨・・・あの人たちこれから自分と同じ生活になるのか・・・
- ・2018年の西日本豪雨・・・家や家財道具がみんな流されてこれからどうするのか？
津波に遭わなかったら他人事だったろう・・・

歳月が流れて

- ・津波を体験した人の中には、いまでも海を見れない人がいる。
- ・あるいは防波堤が嫌で海から遠のいた人もいる。

防災への備え

- ・日本は海に囲まれているから、津波もいつ来てもおかしくない。それなのに「自分のところは大

丈夫」と思いがち。

若い人へ

- ・若い人たちに良い年になりますように。
- ・あらかじめ、逃げる場所を家族で決めておく。そうしたら、一人一人が逃げることに専念でき、探す手間も省ける。